

慢性期重症頭部外傷患者の長期予後

小瀧 勝¹、内野 福生¹、岡 信男¹

¹自動車事故対策機構 千葉療護センター 脳神経外科

【目的】受傷から数年以上経過した慢性期重症頭部外傷患者の長期予後について検討した。【方法】交通事故により頭部外傷を受けた重度の後遺症患者で、千葉療護センター入院中に死亡した20例と退院後に死亡した16例との36例を対象とした。男性32例、女性4例であった。受傷時の年齢、入院時の年齢、入院までの期間、受傷から死亡までの期間、Kaplan-Meier法による生存曲線、死因について検討した。【結果】受傷時の年齢は8歳から62歳（平均33.0歳）、入院時の年齢は9歳から63歳（平均36.1歳）、入院までの期間は5ヶ月から10年（平均3.1年）であった。受傷から死亡までの期間は1年から28年（平均13.5年）であった。Kaplan-Meier法による生存曲線では50%生存は12.5年であった。死因は肺炎などの呼吸器疾患11例、心疾患10例、悪性腫瘍4例、頭蓋内疾患4例、その他7例であった。【まとめ】慢性期の重症頭部外傷患者に対して適切な治療、全身管理、ケアを行うことにより、長期生存が可能であった。今回検討した36例の平均生存期間は受傷後13.5年であり、最長生存例は28年7ヶ月であった。